

- 1  **建築と映像の際**
田中 純
- 2  **都市表象分析**
 - 都市の「表象」や都市の「イメージ」の分析
 - 「非都市」: 都市的ネットワークからこぼれ落ちるもの、その残余
 - 都市のただなかの廃墟
 - 現実の都市を廃墟化する表現: 森山大道らの「東京写真」
 - 都市の中のマイクロな廃墟の発見: 超芸術トマソンや路上観察学
- 3  **テラン・ヴァーグ**
 - 「テラン・ヴァーグ」(建築家ソラ＝モラレス): 「空き地」+「波・曖昧さ」→1970年代以降の写真における都市表象の特徴
 - 都市の荒廃を示すと同時に、管理された空間とは異質の、未知の可能性(+無気味さ)を秘めた場所
- 4 
- 5  **建築零年・都市零年**
 - 「建築零年」(鈴木了二)
 - ← ロッセリーニ『ドイツ零年』: 1947年のベルリン
 - 都市零年 City0.0
 - ただし、起源としての0.0ではなく、都市1.0や2.0のただなかの陥没地帯、その「空隙」
- 6  **「都市の詩学」へ**
 - 「非」の論理ではなく、マイクロな局所的構造としての「境界」(「際」)や「敷居」に着目
 - → 都市や建築の詩的、言語テクスト的な原型的構造(=想像力の論理)にアプローチ
 - ← アルド・ロッシの都市論・建築論: とくに重要な境界性の構造
- 7 
- 8  **『都市の建築』(1966)**
- 9 
- 10  **海と陸との境界(際)に立つ建築物**
 - 世界劇場(1979-80)
 - 灯台のモチーフ
- 11 
- 12 

- 13
- 14
- 15 **海辺の貝殻(=うつぼ舟=灯台)
としてのロッシの建築**
- 16 **門司港ホテル(1998)**
- 17 **虚ろな器としての建築=貝殻**
- 18 **貝殻のときめき**
- ① 海貝よ
石と白む海の娘
汝は童の心をうち奮わす
(アルカイオス)
- ② ときめきは、石ででき海によって削られた固い殻をもっている。まるで都市をかたちづくるスチール、石、セメントの大架構の殻のように。
(ロッシ)
- 19 **『科学的自伝』(1981)**
- アイデンティティを失うための自伝
 - ←アントニオーニの映画『さすらいの二人』
 - 「建築を忘れること」→建築と非建築との境界性
- 20 **東京の境界**
- 湾岸
 - 内陸における曖昧化→大東京圏
 - 境界の経験は失われたのか？
- 21 **路上観察における境界の発見**
- 22
- 23 **境界の経験**
- 「無用門」「純粹階段」など→機能を果たさなくなった境界→だからこそ、「境界」性は強く意識される＝「境界」そのもののシンボル(象徴)となる
 - 宗教的・象徴的な境界のない近現代の都市において、このように無用物化した「境界」のほうが境界を意識させる
- 24 **境界経験の意味**
- 通過儀礼(rites de passage):ある状態から別の状態への移行:結婚式、成人式、葬式など
 - とくに「二つの世界の間をゆらゆらと揺れ」る境界経験の重要性
 - →東京における想像上の「通過儀礼」としての路上観察
 - →通過儀礼とは一時的な死の経験→異界と触れ合う場としての

境界

- 25 **生と死の境界／陸と海との境界**
- 水棲動物から陸上への進化＝羊水のなかからの誕生→世界各地の洪水神話
 - →川辺や海辺の神聖な、ないし、不吉な性格→「河原者」の差別
 - 東京を洪水で沈めたイメージとしての中沢新一『アースダイバー』: 大洪水後の東京の地図

26 27 28 29

「びんを文明の海の広がる浜辺で拾い上げている、そんな想いがいつでもつきまとうのです。」

- 30 **アルド・ロッシ**
《学校からの帰り》(1984)

- 31 **黒沢作品の都市表象**
- 原型的構造に注目→境界性: 湾岸、坂、異世界への通路など
 - 『叫』における湾岸: 大洪水後の東京
 - 『アカルイミライ』のクラゲ
 - 『トウキョウソナタ』の海

- 『叫』: 船上から見える岸辺の黒い建物とそこにいる赤い服の女
→セイレーンのモチーフ?

- 32 **セイレーン**
- セイレーン: ギリシア神話の英雄オデュッセウスの一行をその歌声で誘惑したという女頭鳥体の魔物。誘惑に失敗して自殺。→元々は死者の魂の表現?
 - セイレーンの島: リ・ガッリ諸島: 南イタリア、ポジターノの沖合約5キロ。カプリ島からも見える。

33 34 35

- 36 **カサ・マラパルテ(カプリ島)**

37

- 38 **ヴィラ・リュシス(フェルセン男爵の邸宅)**
カプリ島

39

40 41 42  クラヴェルの塔と洞窟住居(ポジターノ)43  セイレーンの誘惑

- 「ホメロスのセイレーンの島々、ユリシーズの眼に白く輝く人骨に見えた黒い岩々、そこに汚れたセイレーンは、腐った息と美しい声で、巣をつくったのだ。」(クルツィオ・マラパルテ)
- 1900-30年代:セイレーンの歌声に引き寄せられ呪縛された芸術家や思想家たち:マラパルテ、フェルセン男爵、ジルベール・クラヴェルなど、
- →20世紀の危機的な時代における、特殊な集団的オブセッション